

<書評>

Kyoko Shinozaki 著

Migrant Citizenship From Below: Family, Domestic Work, and Social Activism in Irregular Migration

(Palgrave Macmillan 2015年 218頁 ISBN: 978-1137410436 US\$100.00)

小ヶ谷 千穂



本書は、ドイツにおける非正規滞在移住者 (irregular migrants) であるフィリピン人家事労働者 (domestic workers) の日常実践に着目しながら、新しいシティズンシップ (citizenship) の発想を導き出そうとする意欲的な著作である。著者によれば、ヨーロッパの文脈において非正規移住家事労働者は、個人家庭での家事労働という搾取的な労働環境の中で労働者としての権利を奪われ、さらに非正規滞在という法的地位によって受け入れ社会において不可視な存在であると、ともすればステレオタイプ的にとらえられてきたという。しかし本書は、送り出し社会も含めたトランスナショナルな文脈の中で彼女ら・彼らの存在と行為とをとらえなおし、その日常的な実践の中から、「下からの移住者シティズンシップ」 (migrant citizenship from below)、という新しいシティズンシップのあり様を、長期間にわたるフィールドワークの成果から浮かび上がらせようとしている。

「国際移動とジェンダー」という研究領域においては、世界各地で移住家事労働者に関する著作や論考が積み重ねられてきた。ジェンダー、シティズンシップ、トランスナショナリズム、という本書の議論を貫く分析軸は、いずれもこうした世界規模での研究蓄積の中で、さまざまに議論されてきた重要な概念である。国家との関係においてまず「非正規滞在」という立場を持ち、かつ雇用主家庭という「私的」領域で労働者として活動するという、二重の意味でフォーマルなシティズンシップから遠ざけられているような存在であるフィリピン人非正規労働者に光を当てる本書は、理論面でも、また綿密なフィールドワークに基づく実証面、質的分析という点でも、今日の「国際移動とジェンダー」研究の一つの到達点を示すものとなっていると言える。

以下、本書の内容と主要な論点を紹介していきたい。

序章および第1章「下からの移住者シティズンシップ」 (“Migrant Citizenship from Below”) では、本書の理論的立場が丹念に議論される。著者が本書全体の議論において打ち出している新しいパースペクティブである「移住者シティズンシップ」 (migrant citizenship) という概念は、第1章において以下のように説明される。まず第一に、「移住者シティズンシップ」が示すところは、それが複数の国家をまたいで実践されるものであることである。上述のように受け入れ社会において「非正規」であり、その空間移動が制限されているようにみなされてきた移住者たちも、ひとたび送り出し側のフィリピンを視野に入れれば、そこにはトランスナショナルな行為主体としての彼女ら・彼らの姿が見えてくる。筆者が「トランスナショナルなレンズ」と呼ぶところのこうした視点が、ヨーロッパにおける非正規滞在者研究において欠如している、というのが本書の第一の主張である。また、移住者のエージェンシーに着目し、ナショナルな構造的制約の中で非正規滞在者が日常的な交渉や戦略を主体的に展開している現実を、筆者は広義の「政治的」 (political) な行為として位置づけ、その点こそが、本書が「移住者シテ

ズンシップ」を「下からの」(from below)のものとして強調する所以であることが、論じられる。

第2章「研究の背景」(“Setting the Scene”)では受け入れ国ドイツおよび送り出し国フィリピンの政策や制度が、どのように本書の研究対象となった非正規滞在移住家事労働者を生み出しているのかが論じられる。続いて、第3章「私的家庭を変化させる」(“Transforming a Private Home”)、第4章「国境を越えるジェンダー化された親業」(“Gendered Parenting across Borders”)、第5章「生まれくるソーシャル・アクティヴィズム」(“Social Activism in the Making”)ではそれぞれ、2001年から2005年の博士論文プロジェクト、そしてそれ以降の共同研究プロジェクトの中で取り組んできた、本書の主な舞台となるシェーンベルク(仮名の都市)およびフィリピンでのフィールドワークにもとづく実証研究からの知見が展開される。

第3章では、労働現場であるドイツ人家庭における非正規フィリピン人労働者たちの雇用主との交渉戦略が、ハーシュマンの「忠誠」「発言」「退出」の概念を用いて分析される。そこでは、フィリピン人移住家事労働者の就労のあり方が、住み込み、通いだけではなく実際の労働内容によってその内部が多様であることが提示される。またフィリピンからの移住家事労働者の多くが経験する、学歴と職業のミスマッチという「下降移動」(downward mobility)が特に男性家事労働者の場合、マスキュリニティの周辺化と重なってより複雑に経験される、といった興味深い指摘がなされている。

第4章は、移住者のトランスナショナルな親業(transnational parenting)について、ここでも女性だけでなく男性家事労働者の経験にも注目しながら、そのジェンダーによって差異化された実践について、論じられている。そこでは、子育てが将来のシティズンを育てると考える立場から、トランスナショナルな親業が「移住者シティズンシップ」の実践であるとされる。理想的な母親役割、父親役割の違いと海外出稼ぎの関係のみならず、いわゆる女性先行型の移動で先にドイツに移動した妻に後から合流する夫の側が、国際移動に夫婦関係の修復の期待を込める、といった興味深い語りも取り上げられている。後述するように、評者が本書の隠れたテーマの一つと考える、男性移住家事労働者のマスキュリニティにかかわる多くの論点を、第4章で紹介される語りからは読み取ることができる。

第3章、第4章が雇用主世帯と家事労働者自身の家族関係というミクロな水準での「移住者シティズンシップ」の実践を描いているのに対し、第5章ではソーシャル・アクティヴィズムと著者が呼ぶところの、メゾレベルでの「移住者シティズンシップ」の実践が描かれる。具体的には、教会を中心にした宗教活動とそこでのリーダーシップ、エスニック・ネットワークを通じた医療サービスへのアクセス、そして(この事例はペルー出身の家事労働者であるのだが)支援団体による非正規滞在家事労働者の労働訴訟への取り組み、という3つの次元が紹介される。いずれもが、冒頭で筆者が強調したように、「非正規滞在」の移住者が、フォーマルなシティズンシップから排除されている条件の下で利用可能な社会関係資本(宗教ネットワーク、エスニック・ネットワーク、支援者とのネットワーク)を動員することによって、「移住者シティズンシップ」を行使したケースと呼べるだろう。

以上のように、労働現場、トランスナショナルな家族関係、そして広く移動先社会において、非正規滞在のフィリピン人移住家事労働者男女が織りなす日常の行為と実践が、本書が提案する「下からの移住者シティズンシップ」のあり様である。「移住者シティズンシップ」という視点は、著者が言うように、ともすれば、受け入れ社会においてすでに安定的な地位を保持している移住者が出身社会においても同時に帰属や社会関係を維持している、といった文脈で議論されることの多い従来のトランスナショナル論に、「非正規滞在」という受け入れ社会における不安定な存在の移住者も、アクターとして登場

させることができる、という点で有効であると考えられる。また、こうした「移住者シティズンシップ」の議論と必ずしも明示的に関連付けて論じられてはいないものの、本書のもう一つの重要な貢献は、男性非正規移住家事労働者の経験のジェンダー分析が行われていることであろう。本書が取り上げているドイツだけでなく、イタリアやフランスなどヨーロッパ諸国においては、フィリピン人移住家事労働者の多くが当初は女性を中心に非正規での流入が開始され、その後、本書の事例が示すように夫や男性親族が、非正規あるいはイタリアの場合のように、女性親族の正規化を受けての家族合流という形でそれに続くという共通のパターンが見られている。男女ともに移動先では家事労働職に従事する、という点も共通している。アジア地域に移動する家事労働者とは異なるパターンでのフィリピン人移住者の移動と就労を、特に「女性職」とされる家事労働職に従事することになる男性労働者の経験からジェンダー分析するという研究課題は、評者自身の研究関心とあわせても、今後その進展が期待されるところである。その意味でも本書が、今後ヨーロッパにおけるフィリピン人移住者研究において参照されていくべき研究であることは間違いないだろう。

紙幅の関係で、今回は本書が扱ったフィリピン人移住者たちの細かな語りの分析にまで立ち入ることはできなかったが、何よりも個々の労働者がおかれた個別の文脈を重視し、均質視されがちな「非正規労働者」の生き生きとした現実に迫ろうとする本書の態度そのものが、この分野の研究の一つのあり方を示していると考えられる。同時に、多岐にわたる論点がちりばめられる中、「移住者シティズンシップ」という概念をさらに理論的に展開できる可能性もあるのではないか、と思わせる部分も本書には残されている。また、「移住者シティズンシップ」と、移住者自身のマスキュリティ、フェミニニティがどのような相互関連性を持ちうるのか、といった点もさらに議論の深まりが期待される。

しかしこうした課題もすべて、事例の豊かさと理論的広がりという本書のすぐれた特質から導かれるものであることは間違いない。本書が「国際移動とジェンダー」研究全体に投げかけた理論的チャレンジの意義は大きいだろう。

(おがや・ちほ／フェリス女学院大学文学部教授)